

巻頭言

福山大学人間文化学部 教授 青木（秋枝）美保

本研究は、文部省採択の福山大学社会連携推進事業、プロジェクト5「地域の文化再発見」の一環として行っている研究「井伏鱒二の文学に描かれた地域文化」において、二〇〇九年十一月二十一日に行ったシンポジウム「井伏鱒二の『在所もの』と宮沢賢治の『文語詩』」（福山大学人間文化学部文化フォーラム・宮沢賢治学会地方セミナー合同企画）の報告である。

福山大学人間文化学部人間文化学科の近現代文学研究室（青木ゼミ）では、社会連携推進事業の一環として、ゼミの授業「文化演習」で、井伏鱒二の「在所もの」について研究を続けてきた。その成果は冊子『井伏鱒二の小説『鐘供養の日』研究Ⅰ』で報告したが、本研究は、さらにそれを宮沢賢治学会と連携し、同時代の作家宮沢賢治の作品との比較を行うことによって、日本近代文学史における新しい分野を切り拓こうとした、研究史上全く初めての試みである。それだけに、関係者の方々にはご無理をお願いし、多大なご協力をいただいた。この場をお借りして深く感謝申し上げる。

宮沢賢治（一八九六年・明治二十九年～一九三三年・昭和八年）と井伏鱒二（一八九八年・明治三十一年～一九九三年・平成五年）は、生まれ年が近く、同時代を生きたということ以外には、ほとんど共通点も接点もないといつてよい。しかし、筆者は、福山大学で四年間にわたって福山市出身の作家井伏鱒二の「在所もの」と言われる作品についてフィールドワークを行い、賢治の晩年の作品との話題の共通性に気がつくようになった。特に一昨年度から、戦時下の金属供出を題材とした小説「鐘供養の日」（昭和十八年）について調査を行った結果、昭和初年からこれらと関連する「鐘作品群」があり、地域産業の動向から時局を眺める視点があることがわかった。それは、島田隆輔氏の論文、文語詩「悍馬」において、軍馬として珍重されるアラブ種の馬を取り上げて描いている点に戦時体制を見る賢治の視点があるとの指摘に通ずるものであった。それが本研究の始まりである。

シンポジウムにおいては、まず宮沢賢治学会顧問で宮沢賢治研究の泰斗入沢康夫氏から「宮沢賢治の文語詩の魅力」と題して、また、昭和文学研究者で元ふくやま文学館長磯貝英夫氏から「宮沢賢治と井伏鱒二の文学」と題して、それぞれ基調講演をいただいた。休憩を挟んで、島田氏と筆者との文章は、『論攷宮沢賢治』第九号中四国宮沢賢治研究会（二〇一〇年十二月）に収録されたものを転載した。入沢康夫氏については、当日用意された詳細な資料を一部編集して掲載した。言及されることの少ない賢治の文語詩の全体像を知る上で貴重な資料である。

なお、翌二十二日は、福山市在住の朗読家藤井康治氏による、井伏鱒二の小説「丹下氏邸」と賢治の「革のトランク」の朗読とトークで親しんだ。また、琴の師範野田祐子さん（高校教諭）に、オリジナルアレンジ「星めぐりのうた」を演奏、歌っていただいた。午後は、福山大学スクールバス二台で、井伏鱒二の文学遺跡実地踏査を行った。参加申し込みは仙台から福岡まで学会員二十名あまり、地域から百名あまり、二日間で述べ二百名あまりの参加者があった。その様子は、中国新聞など、地元誌で報道された。